

第12回企画展
川井村の神楽
2007.10.26~11.25

今年度の企画展では神楽関係者をはじめ、地域の皆さんにお聞きしたお話に基づき、「神楽」と「火祭り」「神社の祭り」などの地域行事とのかかわりを紹介し、また保存会や関係者の皆さんにご協力いただき、たくさんの面や衣装を展示することができました。

川井村には現在、「江繋早池峰（えつなぎはやちね）神楽」と「末角（まっかく）神楽」がそれぞれの保存会により伝承されています。かつてはこれらのほかに「大仁田（おおにた）早池峰神楽」「門馬（かどま）早池峰神楽」「川内（かわうち）早池峰神楽」があり、あわせて5つの神楽が伝承されていました。『川井村郷土誌』にはこの5つの神楽について記録されています。これによると「門馬早池峰神楽」が別当妙泉院により慶安元（1648）年に稗貫郡新堀村（現花巻市）へ相伝されていること、また鈴久名（川井村）の修験者とのかかわりや大正年間には川内（川井村）の人々へも伝承していること、「大仁田早池峰神楽」の神楽幕（明治29年）には「向鶴」が染め抜かれていることなど、それぞれの神楽の歴史を知ることができます。

関連事業として門馬、川内、江繋の各地区公民館で神楽共演会を実施しました。江繋早池峰神楽保存会、末角



神楽共演会の様子「勢剣舞」（江繋早池峰神楽保存会）



「八幡舞」（末角神楽保存会）

神楽保存会の皆さんによる共演は初の試みで、1日に6~8の演目を披露するという内容に、観客からは「感動した」「保存会の頑張りに頭が下がる」などの感想が寄せられました。

神楽の多くの演目は無病息災、五穀豊穡、家内安全、子孫繁栄、長寿などを祈り、悪を払うなどの意味があります。聞き取り調査でも神楽は「悪を払う」「場を清める」「ありがたい」ものだというお話をよく伺いました。神楽が山伏や神道家のものだった当時のことを今現在知ることは難しいことです。しかし現在は担い手である保存会の皆さんの努力や地域の皆さんの支えにより伝承されています。神様とかかわる神楽を「ありがたい」と感じる人々の祈りや願いは昔も今も変わりがなく、心のより所となっているのではないかと感じました。神楽についての調査・記録は今後も他の郷土芸能ともども進めてまいりますので村民の皆様のご協力をお願いいたします。

企画展の開催にあたり江繋早池峰神楽保存会の皆さん、末角神楽保存会の皆さん、中仁澤隆さん、菊池キエさん、細田知子さん、柏順一さん、茶畑丑之助さん、高屋喜多男さん、鈴木満幸さん、中村豊さん、田頭与右工門さん、番賀信一さん、田頭勇人さん、寺倉彦右工門さん、寺倉フクさん、豊坂一寿さん、中村文男さん、高橋金一さん、寺倉弘樹さん、芳門留次郎さんにお話を伺いました。大変ありがとうございました。ここにお名前を記して感謝申し上げます。



神楽面などの展示の様子

◆館務実習の受け入れ◆

9月25日から28日までの4日間、岩手大学の博物館実習生が当館で実習を行いました。実習生は総勢20名で、博物館等で仕事をする学芸員の資格を得るために勉強している学生たちです。

実習では、資料整理や聞き取り調査など、館で行われている日常業務を体験したほか、雑穀畑の見学、ソバ刈りや郷土食作りなどの体験も行いました。

全日程をとおして実習生は、館の仕事には資料整理などの地道な作業が大切であることや、運営には地域の皆さんからの理解が必要だということも実感したようです。

岩手大学の実習生の受け入れは今回で13年目を迎えました。受け入れは資料館の開館準備にあたり、当時の実習生たちに資料収集や整理作業に協力していただいた縁で始まったものです。実習生の力で、聞き取り調査や資料整理がすすんでいます。



聞き取り調査の様子。協力者は芳門重治さん（川内地区）と高屋喜多男さん（小国地区）



「ソバ田」でソバ粉をひく体験の様子。

実習生の感想 岩手大学 渡辺 健一さん

このような機会がなければただ見学して終わりになってしまう資料館も、どんな工夫がしてあるのか、どんなことが問題として残っているのかを発見することができたのではないかと思います。一番の印象として現場の博物館資料館がどういった状況にあるのかを実感できたのが大きいと思います。文化財は貴重だから大切にしようとは当たり前のことですが、限られた予算では教科書どおりの理想的保存管理を徹底することは不可能で、その中でいかに理想に近づけるかということが問題です。そのひとつの解決策のあり方をこの資料館では実現しているのではないかと思います。それは資料館が単独で文化の保存に努めるのではなく、地域と一丸になって文化の伝承を守っていることです。（中略）今回の体験は現代の生活が普通となっている私たちにとって、どれも大変新鮮で、驚きと楽しみをもって取り組むことができました。こうした実際に何かを行い、そのやり方を伝承するというのも資料館のものや文献だけでは充分ではなくて、地域の協力があって初めてできるものではないでしょうか。こうしたものや文献の保存施設としての資料館と実体験・思い出としての地域の融合が、これからの博物館・資料館のあり方なのではないかと思います。

◆展示室リニューアル◆

第一展示室の解説パネルを大きな文字で読みやすいものに取り替えるのを機に、展示の一部を国の重要有形民俗文化財の指定を受けた資料を中心に配置する、展示替え作業を行っています。展示内容は次のとおりです。

★第一展示室

「農耕」「自然物採集」「狩猟、漁労、養蜂」「山仕事」「炭焼き」「職人の仕事」「山の神信仰」の各テーマに沿って、山の仕事や信仰に関する資料を展示します。展示室中央の展示室の柱には、用材ごとに樹木名を記した名札がつけられています。また山仕事や焼畑の様子を映像で紹介するコーナーもあります。

★第二展示室

「宮古街道・ウマとウシ」のコーナーでは、街道の歴史がわかる資料や畜産用具を展示して

います。南部曲屋が再現されていて、その内部には生活用具や信仰の道具が収蔵展示されています。「製糸」「機織」「養蚕」の資料を紹介するコーナーもあります。

★第三展示室

昭和三十年代までこの地で開業していた「小川医院」の診察室を再現し、医師が常駐することが困難だった時代に山間地医療に尽くした先人を紹介しています。また実演や体験ができるスペースでは、生涯学習事業「ふるさと工芸クラブ」の作品を展示しています。

資料の移動は順次行っており、作業は4月いっぱいを目処に終了する予定です。この期間に見学される皆様にはご迷惑をおかけいたしますが、なにとぞご理解、ご協力をいただきますようお願い申し上げます。

◆映像展示室リニューアル

民俗資料館の映像展示室ではこれまで「資料館ガイド」を自動上映して、来館者が見学するときの助けとしてきました。今年度、プロジェクターなどの機器類が老朽化したため、新しいものに交換しました。

これにともなって、上映する番組が増えました。これまでの「館内ガイド」に加えて「木の博物館」の映像ガイドも上映しています。これまで民俗資料館で撮影した調査・記録の映像も公開しています。内容は、聞き取り調査の様子、民俗資料の使い方の再現や、昔ながらの年中行事の様子などで、すべて村内の皆様にご協力をいただいていた撮影したものです。

上映方法は、見学者が見たい番組のスイッチを押すだけで、番組が自動上映されるものです。スイッチはスクリーンの右側にあります。

映像展示室番組表

- No. 1. 資料館ガイド (約10分)
- No. 2. 木の博物館ガイド (約30分)
- No. 3. 資料館の活動 (約10分)
- No. 4. 技術の伝承 1・繊維 (約6分)
- No. 5. 技術の伝承 2・ものづくり① (約6分)
- No. 6. 技術の伝承 3・ものづくり② (約6分)
- No. 7. 技術の伝承 4・カヤ刈り、ひくさ刈り (約6分)



【民俗資料館二階・映像展示室】
正面スクリーンの右側に番組表とスイッチがあります。見たい番組のスイッチを押して下さい。
↑
スイッチ

北上山地民俗資料館のホームページは川井村のホームページから見ることができます。



川井村公式HP <http://www.vill.kawai.iwate.jp/>
→北上山地民俗資料館

◆民俗資料館へ寄贈・寄託された資料

平成19年3月1日～20年2月29日まで111点

佐々木富治様「日本海海戦録」(複写)、船ヶ沢子々蔵様/水筒など、山崎勇雄様/箆笥など、山口幸則様/ウマの鞍、横道廣吉様/大工道具など、小国小学校/鬼瓦(寄託)、末角神楽保存会/神楽幕(寄託)、川井村役場/山田線開通記念駅伝競走準優勝杯

ご協力ありがとうございました!

寄贈・寄託された資料は、スペースの都合で展示はできませんが、もとの所有者のお名前を明記し、展示資料と同様にきちんと管理しています。今後は企画展などで紹介していきます。

◆民俗資料のガスくん蒸(11月26日～12月4日)

民俗資料館では2年に1度、専門の業者に依頼して民俗資料のガスくん蒸を行っています。ほとんどの民俗資料は木材や布などからできているため、常に虫やカビの害に気をつけなくてはなりません。また、密閉された空間ではないため、日常的にも清掃などを行い、くん蒸を行った後も害虫がすみにくい環境を維持するよう努力してまいります。

◆今年度の入館者(～2月末)

一般	学生	児童	団体	免除・公用	合計
517	19	20	348	189	1,093

来館者から

- 鋸の数と種類、初めて見てびっくりしました。協力した方々、すばらしいです。展示も雰囲気を感じさせてとてもよかったです。古くから林業が栄えた村であったことを感じさせてくれました。
- 昔の北上山地の生活ぶりがよく解る展示でした。ただ、比較する意味で現在の川井村の暮らしを紹介してほしいかったです。

村内では川井西小学校の皆さんが見学に来ました。6年生は縄文時代の学習で、資料館にある縄文土器を見学しました。4年生は資料館の仕事などを新聞にまとめて発表したそうです。1、2年生も資料館でしらべた昔の道具についてクイズにして発表したそうです。



温もりを保つ

この「あんか」は、中に灰を入れてその上に熾した炭火や熾きを置いて「やぐら炬燵」の中に据え置いて使った。上に布団を被せて人々が暖を採る目的で使用し、現在の電気炬燵と同じ使い方をしたものである。現在でも保温したいものがあれば電気炬燵の布団の中を大いに利用するが、先人達もまたご飯の保温等に利用したようだ。

私は現在秋田県の依頼を受けて「阿仁またぎ」の調査に参加しているが、奥羽山地は気象条件から「もの」の名称に至るまで、北上高地とは趣が異なっており、新鮮な体験をすると共に、いろんな勉強をさせて

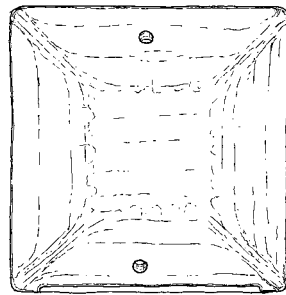
実測図は民俗資料をきちんと計測して図面化したもので、民俗資料の素材、構造、製作技術、外形などの情報を伝達することができます。名久井先生は実測図には次の3つの役割があると述べておられます。

記録保存資料（未来への情報伝達）

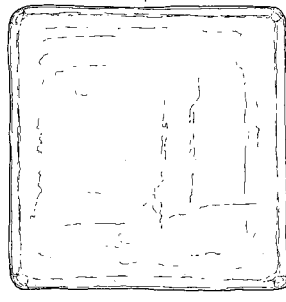
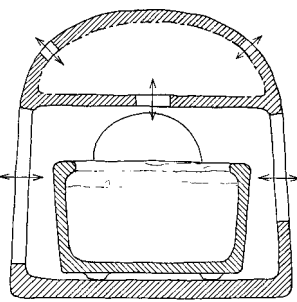
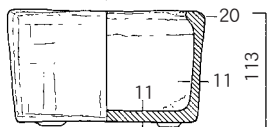
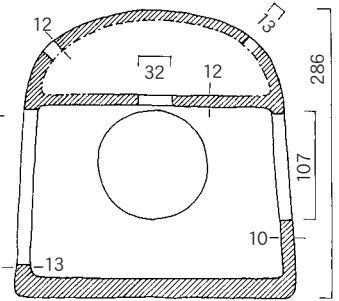
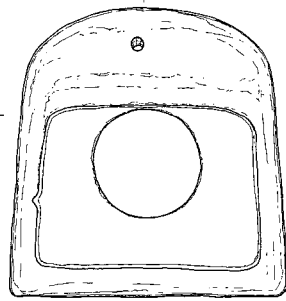
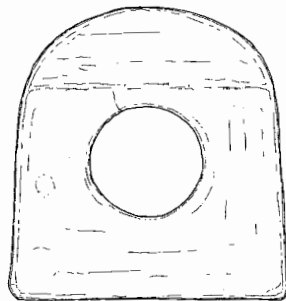
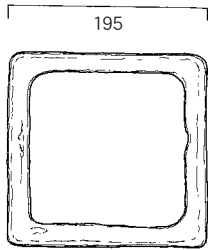
啓蒙資料（一般の人々への情報伝達）

学術資料（研究者への情報伝達）

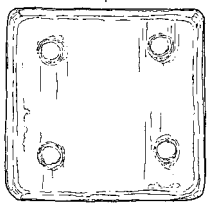
作図者がじっくりと観察し、丁寧に仕上げられた実測図は、当館の記録となるだけではなく、他地域や未来へ向けた情報発信の手段となります。地道で労力を必要とする作業ですが、今後も川井村の伝統文化を記録する実測図作製を続けていければと考えています。



伝票番号 562
資料名 あんか
話者 山崎武志氏
旧所有者 山崎武志氏
入手方法 箱石の店から購入
使用者 家族のもの



伝使用年代 ストープを使い始める頃まで（昭和20年頃）
使用方法 木炭を入れて【こたつ】中に置き、冬期ご飯などを温めるために使用した。
備考 【こたつ】はおよそ120cm四方で、6人が入れるくらい大きさだった。



176

272

276

調査年月日 2002年8月9日
調査者 安保里央（岩手大実習生）
作図者 名久井芳枝

頂いている。「またぎ資料館」に「えじみ」と名前のついた初めて見る資料があった。「えんつこ」に近い技術で作られた藁製品だが、形が円座に近くそれでいてうつすら窪みがある。同じ技術で作られた笠状のものが火棚の上に置かれており、誰もそれが「えじみ」と一体化するものとは気づいていなかった。笠にしては重すぎるので、これは何かの蓋ではないかと私が気にした所、幸いその正体を知っている人が現れ、「えじみ」の蓋であることが判明した。使用方法はご飯を炊いた「つば釜」をその窪んだ円座に置き、周りに藁を巻いて蓋をする保温用具のこと。人々が温かいご飯にこだわったことが、このふたつの資料から伺い知ることができた。北国の冬に温もりを見つけることは、生きる智慧の発見でもある。

名久井芳枝（名誉館長）

